

13. ヴォーリズ設計の歴史的住居と環境の保全と積極的活用

住空間アートスペース 駒井邸（駒井卓記念館）
(京都府京都市)

I. 活動の背景と目的

京都、東山最北の峰、比叡山から大文字山にかけて、なだらかに続く瓜生山あたりの麓、北白川を北に走る琵琶湖疎水分流、この水辺に長い年月を経て大きく育った木々に囲まれ、静かに品格を持った洋風建築、駒井邸が建っている。75年ほど変わらぬ風景がここにある。

当時、京都（帝国）大学の北の田園地帯であったこのあたりが、教授達の住まいとして分譲されたそうだ。後に世界に名を馳せる学者を世に多く輩出していく学者・教授村と呼ばれる地区となっていくのだが、その最初の二軒のひとつと聞く。南に京都大学工学部教授、喜多源逸邸、北に同理学部教授、駒井卓邸、今も往時の姿を留め隣り合ってたたずむ。

館の西側に沿って流れる疏水辺りは後に観光コースとなる哲学の道の北部、当時は哲学者の西田幾多郎も散策し、駒井邸にもしばしば立ち寄ったという。現在も学者、文化人が多く住む独特の雰囲気をもった街であり、ノーベル賞を受賞された故福井謙一博士の邸宅も疏水をはさんだ西にある。

周辺には、ユニークな芸術教育で注目されている京都造形芸



駒井邸



すぐ横を流れる疎水

駒井卓博士：(1886～1972) 姫路生れ。京都帝国大学理学部教授。同学部長。瀬戸臨海実験所所長。国立遺伝学研究所創設に関与。同研究部長。)

動物分類学・系統学・遺伝学等広範囲に研究生涯をかけて大変優れた業績を上げ、近代日本の生物学、動物学、遺伝学の基礎を築き発展させた。人類遺伝学への貢献も計り知れない。一般の人々にとっても、生物の教科書で学ぶ、ショウジョウバエの遺伝や、昭和天皇にご教授されたこと、天皇が採取研究された生物コトカラゲが珍種で世界的な発見であったこと等の話題でも知られた。数多くの優れた研究者を輩出せしめた類まれな教育者でもあった。真に学問に取り組もうと求める者には学歴、性差の区別なく、研究できる環境を与えた。時代背景から困難だったと思われる女性の研究者も多く育て、中から世界的逸材も輩出した。博士は生涯ダーウィンを敬愛し、数多い著作の中に、学童向けまで、幾種類も本にしている。日本における駒井卓邸は、正にダーウィンやメンデルの家に相当する貴重なホームなのだ。

W. M. ヴォーリズ：(1880～1964) については人間ヴォーリズ研究も加えて近年ブームになっているほど知られて來たので改めて紹介の必要もないだろうが、少しプロフィールを記すと…

1905年米国より近江八幡に英語教師として来日。クリスチャニズムに基づく伝道、教育、メンソレータム事業等、様々な活動をしたが、基盤となった設計建築事業は、学校、教会、デパート、ビルディングから個人住宅まで全国に数多く展開した。

例：山の上ホテル、主婦の友社、神戸女学院、関西学院、心斎橋 大丸等々。

術大学等もあり、地域に根ざした芸術活動が活発である。叡山、東山の山麓は日本の歴史上、重要な意味を持つ地である。同時に、そこに花開いた幾層にも折り重なる文化、芸術が生まれた。ここには、それぞれの時代、各界の人々が交流したサロン文化の歴史が連綿と続いてきた風土がある。

この建物は、動物学、遺伝学の権威であった駒井卓博士の遺邸で、W・メレル・ヴォーリズ設計により1927年（昭和2年）に建てられた。

1972年、駒井卓博士が、そして翌年には静江夫人も亡くなり、遺邸はまもなく駒井家の関係する企業が借り受け、研修所、健保組合の保養施設として利用されたが、1997年3月に撤退した。

以前より邸の魅力に取りつかれていた我々（=本田夫妻）は、妻佳子が管理人として採用された、1986年8月より邸内の離れに居住していた。企業撤退の通知を受け、新しい借り手が見つからなければ更地にして処置ということもあり得ると知った。この良質な空間は、次世代に受け継がれるべき文化財、人々の共有財産として、門戸を開き、先人の偉業、住空間を直に触れ得る場に出来ないものかと、所有者の駒井喜雄氏に相談した。氏の理解と協力の下に97年4月、修理改装作業の後、「住空間アートスペース駒井邸・駒井卓記念館」としてオープンした。（研修所に改装されていたので、設計図、昔の写真などから、畳をはずし元のベッドルームにするなど、可能な限り元に戻していった。エアコン取り付け以外は補修、内部の全塗装など、昼夜突貫の個人作業であった。）

オープン後、楠秀男の照明具（研修所時代に照明は全室蛍光灯に換えられており、暖かい雰囲気作りのために氏の作品と置き換えた）と橋本文良のドローイング二人展や、村田肇一の陶展、庭でドイツの作家のインスタレーション等々を開催。サロンコンサートも初回からプロの演奏家でスタートし、ジャンルも室内楽からタンゴ、ハモニカと多様で、図らずも上質の展覧会、演奏会が続いて、駒井邸での催しは一層期待が寄せられるようになった。テレビ、新聞、雑誌などに、ニュース、特集等で取り上げられ、一住宅でのサロン活動が、エリアを超えて伝わりだす。

1998年4月、昭和の建物では初めて、京都市指定有形文化財に指定された。施主の駒井卓博士が偉大な生物学者であったこと、W.M.ヴォーリズの代表的住宅建築であり保存状態も良い等の条件を満たした上に、住空間を生かした芸術文化の交流活動の場として開いたことも、ポイントになったそうだ。京都には歴史的建造物が集中するせいか、これまで近代建築の価値付けは余りなされて来なかつたが、市も、築年数は新しくても、時代を代表する建物、特に個人住宅が消失していく現状に、転換を図る時期にあったのだろう。



駒井邸正面玄関



室内（サロン）

活動の目的は、建物とその環境の保護保全が第一ではある。しかしそれは、大前提であり目的そのものではない。建物（更に文化財なら、保護されるはずだが、危うい現状もある。）は、その時代に生きる人間のために有効に使われるべきであり、時代の要求する活用があつてこそ健全であると思う。

あまり門戸を開ける機会のない文化財や、専門的博物館も意義がある。が、私達が目指したのは、価値ある魅力ある建物だからこそ、誰でもジャンルを超えて参加、交流、発表出来る場にして、地域に根ざした地道な活動ではあるが、国際的な地域性も生かし、自然体の人間交流の場にすることであった。文化芸術の発信基地としての可能性を試み、それらを次世代にバトンタッチして行きたい。

II. 活動内容

①駒井卓記念館として、博士に纏わること、専門分野の生物学や自然科学関連企画。

*駒井博士の研究の足跡を知るための資料の公開
=「一般公開」等

*当時、博士に教授を受けた研究者達による、交流会や講演会
=「駒井卓先生を偲ぶ会」開催。「森の教室」開催（大島長造先生）等。

②駒井邸がW. M. ヴォーリズ設計の代表的な作品である事から、建築関連の企画や、住空間の良さを生かした催し。

*ヴォーリズの写真集の住宅作品（36棟）のひとつに上げられており、自身の円熟期の建築である。表面的な単なる見学会では味わい得ない、訪れた人が住空間に身を置きゆったりと時を過ごす機会をつくることにより、設計者の思想を深く感じ取れることが大切。

=「見学会」、「交流会・カフェ風」、「シンポジウム」

*良質な住空間での展覧会は、無機質な展示会場と違った共鳴や、対比の妙、作家もこの空間ならではの創作を生む…等、新しい発見、創造がある。

=「展覧会」：絵画・彫刻・工芸（陶芸・染織・ガラス・照明…）・写真・現代美術・インスタレーション・生花。

③世界に類を見ない文化都市京都、その特性を生かしたプログラム。

*千二百年、都でありつづけた歴史の中で、ありとあらゆる芸術、文化が折り重なって生れ育ち、熟成し洗練を極めた京都、そこにはあらゆる階層の人々が集う場所があった。古くから寺院、神社、町衆の寄り合い処、御茶屋…権力、財力のあるパトロンが場を提供する事もあったろうが、近代においては、カフェ、飲み屋、師の家…溜まり場を含め、何らかの形で所謂サロンが開かれ、新しい文化が生れてきたのではないだろうか。しかし、最近はどうだろう、詳し



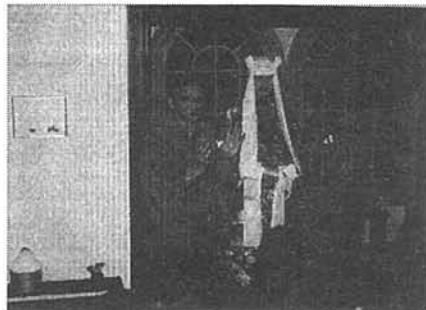
森の教室



写真展



見学会（中庭にて）



サロン狂言
茂山七五三氏 講演と素狂言



サロン寄席
桂都丸 落語の宴



サロンコンサート
ミュゼットジャズ



京都造形芸術大学造園実習

く調査したわけではないが一昔前に比べても、かなり少なくなっていると思う。マスコミや、各方面の方からサロン文化の衰退を危機感を持って報じられたり、駒井邸のサロン活動が非常に貴重であると話題になる事に、逆に驚いた次第である。サロンの良さは、その容積（=狭さ）にある。演奏家・講演者と観客との間が、大ホールでは味わえない、息づかいを感じることの出来る距離であることだ。

=「演奏会」・「古典芸能」（狂言・落語…）・「講演会」（仏教講座・日本文学・京都の文化…）・「茶会」・「詩の朗読会」等。

④この3つを基本に、これらが融合したものや、他のグループとのネットワーク作りや共同企画。異文化交流等。

=「演奏会」・「講演会」・「シンポジウム」・「見学会」等。

III. 活動の効果及び今後の課題

活動を始めて5年、実に多くの方々との交流により、たくさんの情報が寄せられ、ご助言も戴いた。そこで改めて、文化遺産たる様々な建物も、何らかの形で公開されているものでも、限られた範囲（時間、期間、用途、対象）の公開が多いことを知った。ここ駒井邸から見ればうらやましいほどのキャバシティーと特色を備えているものも多い。イメージが膨らみ、活用方法をついつい思い描いてしまうが、困難な問題があっても、努力と工夫次第で生き生きしてくるものだ。そこから何か解決への糸口が見つかるような気がする。

小規模な駒井邸を精一杯、試行錯誤しつつも可能性を実証してきたことが、支持を得たことは予想外の成果であった。また、何らかの形で駒井邸を体験した人の心の中で思いが大きくなり、私達の知りえないところで「駒井邸」が一人歩きしている。お陰様で、イベントへの申し込みや、ボランティア希望者が増えてきた。

当初は地域や近隣からの参加が主だったが、昨今は遠隔地、また海外からと、参加者のエリアが広がっている。インターネットの普及も情報伝達の加速を増した。他の地域で同様の活動を目指している個人やグループが、良い前例として、参考にしたいと、訪問取材に来られることも多くなかった。

また大学や専門学校の授業の一環として、教育の場になることもあったり、PTA、教会関係等様々な団体や、企業研修、旅行社等の見学会もそれぞれユニークなものになり、参加された方が又別の企画を提案するといった、プラスの連鎖も起きている。

当初はこちらから周囲にお願いして成立していたものだが、今は、こちらへの呼びかけが圧倒的で、その中からふさわしいところとお話を進めることができるようになった。縁を大切に、柔軟に、しかし独自性のある楽しく集えるものを心がけてきた。

助成対象の一年間の活動は、そのどれもが充実し、好評を得

たものであった。

主催した主なものは、

*シンポジウム「それぞれの駒井邸、私達の駒井邸」を、所有者、市民、パネラー（京都市文化財保護課・フォーラム駒井邸の中から建築家等）、運営の我々が、法然院を会場に、梶田貴主の司会で開催。60余名の熱心な参加者で、記録書を残すべきだと言う声も出たほど、貴重な意見交換が行われた。

*春秋の一般公開。

*茂山七五三氏のサロン狂言「炉辺塾」。

*駒井邸「森の教室」シリーズ・山極寿一氏「ゴリラに学ぶ自然の楽しみ方」・大島長造氏「環境と寿命」・中村桂子氏「生きものの感覚で生きる」。

*NHKのフランス語講座で活躍のパトリス・ルロア氏の「詩への誘い」とドミニク・シャニヨン氏のシャンソン。

*ミュゼットジャズ等等。恒例の回を重ねた「仏教に親しむ」、「落語の宴」、「バロックお国めぐり」…。

今の形ではラストコンサートになった、ドイツのツイマーマン等によるバロック音楽の昼夜の公演共、会場あふれるお客様の熱い拍手に、サロンの再開を確信した。

共同企画の主なものでは、京都市文化観光資源保護財団の「駒井邸・夜の特別見学会（ライトアップ）」は市の広報も浸透して話題になり、大勢の見学者が訪れ、1Fはサロン、2Fは博物館、テラスは舞台に、庭はカフェに…夢の宵が3晩続いた。ご理解ある応援を頂いて大変励みになった。自主企画の美術展はなかったが、いくつかいい展覧会があった。

また、一昨年の大企画展、金の駒井邸出現で話題になった、現代美術の「麻谷宏展」は、氏がその発想を煮詰めて発表した次の仕事が、海外からも注目されるアートフェスティバル「芸術祭典・京」（仁和寺）でグランプリ受賞し、格段の評価を得たことも、水面に一石を投じる勇気が、文化の創造と発展に必要な事を示唆してくれたように思えた。

この点は、この5年間の活動に共通することで、時間と空間の座標軸の中での接点に居合わせた私達の役割は結局、「縁を結ぶ」<=出来るだけ魅力的なものにして、誰もが楽しめ、より質の高いコミュニティー作りと、その輪を広げる>というところであろう。

最後に・・・

この度、この駒井邸を、全ての人の財産として末永く維持、保存、活用していくように、保護しようという公的機関に、所有者の駒井家が寄贈されるということになりました。

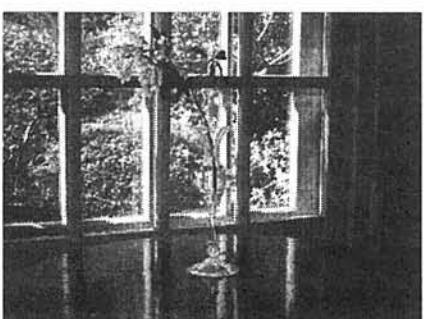
駒井家のご英断は、未来永劫、世界中の人々から賞賛される事でしょう。



シンポジウム
「それぞれの駒井邸、私達の駒井邸」
(於：法然院)



サロンコンサート
ドイツのリュートの名手ツインマーマンを迎えて”バロック音楽への誘い”



窓辺の花（あせび）

建物及び庭が、将来的に存続、保護される事になったことは、とても喜ばしい事で、私達も望んでいながら、充実が困難であった、駒井博士の業績を称え、整備され、歴史の再発掘に繋がる、貴重な文化財として認められた事は大変嬉しく思います。

博物館的要素が大きくなると思いますが、欧米に見られるように、一般の市民も、ボランティアを含め、関わることが出来、自由に参画出来る空間であり続けてほしいと思います。駒井博士やヴォーリズの精神を深く捉え、そのポリシーに則った器の生かし方をしていただける事を願っています。

この5年間に駒井邸に存在した全ての出会いは、それぞれの方の心に生き続けるでしょう。お世話になった皆様に心から感謝いたします。

そして、この間、自由な活動をさせていただき、信頼と寛容の精神で、我々、若輩を見つめて下さった御当主、駒井喜雄様、駒井家の方々に深く感謝お礼申し上げ、駒井邸を後にしました。



駒井博士の書斎の机上
ピーグル号、著作、ダーウィン…

<編集補記>

駒井邸は2002年6月1日より財団法人日本ナショナルトラストの所有に変わりました。